

く、平成二年十二月二十六日奇しくも引揚者に対する感謝状が決まったことが新聞に報道された日の朝、七十八歳で静かに、やすらかに、息を引取ったのでした。母シナノの一生の労苦を省みる時、なにか形のあるものを残して、あの労苦を後世に言い伝えたいと思ひ、当時三歳の私が母から聞いたことやその後の様子を書いたものです。

NHKで孤児となった妹が判明、

永住帰国に

福島県 上遠野 香

私は昭和十六年六月、まだなんの分別もつかない六歳の時、両親と弟妹の五人で満州の東安市に渡航した。父は興農合作社に勤務し、その間妹二人が産まれたが、父は昭和十八年四月、現地召集となり、出征した。

母は幼い子供四人を養育するため、父の勤務していた会社の雑役婦として、一生懸命に身を粉にして働き

づくめであったが、妹は栄養失調で昭和十七年死亡した。

昭和二十年八月、ソ連軍の参戦で、私達母子四人は、八月十日、命令で避難するため、東安駅で列車に乗ったが、この駅で移動中の日本軍の爆弾が破裂し、列車もろとも避難民約七百人が死傷した事故に巻き込まれてしまった。どうして爆発が起きたのかは不明である、あとからはソ連軍が進攻して来る、その悲惨な状況は、どのように表現して良いか、その場にいた者でなければ実感として理解できないような阿鼻叫喚の巷と化した。母と弟、妹は爆死してしまい、私と一番上の妹光子が難を逃がれたが、母や弟妹の遺体の確認や、埋葬などする暇もなく、ソ連軍からの危害を避けるべく、妹の手を引き、日本軍と一緒に山中に逃亡した。

私が十歳、妹は八歳だったので、敗走する軍隊と同じ速度で歩くことはとうてい不可能であった。私は妹の手をしっかり握り、遅れないよう懸命に努力したが、道もない険しい山の中の行進と、しとしとと雨が降ってきて、食糧もなく、空腹続きであったので、妹

光子は衰弱がはなはだしく、今にも息が絶えるような状況であった。私も疲労の極に達し、頭がふらふらして物を考える力もなく、ついに妹の手を放してしまった。意識もうろうの状態とはいえ、行方不明になってしまった妹のことを考えると、その後私の心の重荷となり、自責の念でいっぱいであった。

昭和六十年九月、NHKテレビの中国残留孤児で訪日した妹光子を隣近所の人が見て知らせがあり、対面調査の結果光子と判明した。その時妹は「なぜ私を捨てたのか」と幾度となく、うらみ言をいったが、ほんとうに辛い思いをした。その罪ほろぼしのためにも私の出来る限りの力を出し、戸籍を回復し、昭和六十三年九月二十二日、現地で結婚し、誕生した子供達家族五人で永住帰国することが出来て、私も心の責苦から解放された思いである。

妹と離別した後、山中をさまよい歩いているうち、昭和二十年十月末、ソ連軍につかまり、敦化市から軍人はシベリアに強制連行され、民間人は、吉林市難民収容所に送られた。収容所の生活も衣食住にこと欠き、

毎日多くの人が栄養失調や発疹チフス、寒さのため、死んでしまった。

私はあの時の列車爆破での母、弟、妹の爆死、逃避、収容所の苦難は、今でも頭から離れることはない。吉林収容所で、福島県人国分多平さんと知りあい、私の境遇に同情し、昭和二十一年十月十八日、親代りとなつてもらい、一緒に帰国し、父の実家西白河郡東村に到着し、父の兄に引き取られた。

昭和二十三年四月、父がシベリア抑留から無事元気で復員して来たので、父と生活を共にすることが出来た。父は再婚し、異母弟妹もできたので、私は独立を決意し、いろいろとお世話になり、私はその恩を一日も忘れたことはなく、親とも思っていた国分多平さんを頼り、相談の結果、その近くに転居し、呉服屋の手伝いをしながら、生計を立てるようになった。

妹光子は、朝鮮人に拾われ、小、中学校を出してもらったが、農作業の重労働に追われ、昭和三十五年結婚し、二男一女をもうけたが、夫には若くして死に別れ、その苦勞は並大抵のものではなかったと思う。妹

は、日本に帰国して三年になるが日本語はまだ覚えられず、生活習慣の違いから、戸惑うことが多く、自分の力で生活を立てるのが非常に難しい状況にあるが、私も機会あるごとに妹の家庭を訪問し、妹達家族の幸福のため、万難を排し、手助けに最善をつくしている。

一族あげての開拓団の果ては

福島県 立花 開

昭和十五年二月、大陸に夢と希望に燃え、勇躍して満蒙開拓第九次福島県集団開拓団の一員として渡満し、三江省富錦県肇架山に入植した。しかし、団の運営について意見が対立し、大槻町出身の私達家族と、同じ安積郡郡山出身の四大家族がなんの調査、事情聴取もなく、突然昭和十七年五月、団を追放されてしまった。

行くあてもなく、妻と三人の子供を連れ、山中を流浪していたが、第十次集合緑ヶ丘開拓団に潜入した。

この開拓団は、十戸足らずのちいさな浪人集落で、力はなく、営農気力にも欠け、その日その日をただ慢然と過しているような集団であった。私は独力独歩、石の上にも三年と精一杯働き続けた。

そして、ついに生活基盤を確立し、これから渡満の志が達成できると前途に明るさが見えてきた時であったが、昭和二十年五月、現地召集となり入隊した。

ソ連軍参戦で八月十三日避難命令が出て、妻は妊娠九か月の身重の体で三人の子供と少しばかりの荷物を抱えて出発し、佳木斯市より列車で綏化経由で奉天に到着した。

収容所の生活は悲惨きわまりなく、このままでは全員死ぬほかないと思ひ、長男兼を中国人に預けたが、寒さと飢えから生まれたばかりの次女が死亡、次男も昭和二十年十月、一か月間に二人の子供を死なしてしまった。妻は中国人宅に身を寄せたが、昭和二十一年十月重病のため死亡し、長女は、そのまま残留した。

昭和十九年四月、私の両親は家族七人で第十二次郡山分郷集団開拓団員として三江省依蘭県西阿に入植